

## 楚辞「惜誓」訳注

著者	矢田 尚子
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	26
ページ	51-74
発行年	2021-12-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00134716">http://hdl.handle.net/10097/00134716</a>

## 楚辞「惜誓」 訳注

矢田 尚子

漢代楚辞作品研究会

### はじめに

小稿は、科学研究費補助金基盤研究(C) (一般) 18K00348「漢代楚辞作品の多角的研究—文学・思想・文化研究資料としての再評価をめざして—」における研究成果の一部である。

本研究は、漢代楚辞作品の文学資料としての新たな側面に光を当ててその価値を再評価し、中国文学・思想・文化史上に果たした役割を明らかにすることを目的とする。研究メンバーは、上原尉暢(研究協力者)、狩野雄(研究分担者)、塚本信也(研究分担者)、矢田尚子(研究代表者)の四名である。

後漢の王逸『楚辞章句』によれば、楚辞という文学ジャンルは、戦国時代の楚の屈原によって創始されたものであり、『楚辞章句』所収の十七作品のうち、「離騷」「九歌」「天問」「九章」「遠遊」「卜居」「漁父」の七作品が屈原自身の手になるものだという。また「九弁」「招魂」「大招」の三作品は、屈原の文学の後継者である宋玉や景差の手になるものであり、残る「惜誓」「招隱士」「七諫」「哀時命」「九懷」「九歎」「九思」の七作品は、それぞれ漢代の賈誼、淮南小山、東方朔、嚴忌、王褒、劉向、王逸が、屈原の精神に則って作ったものであるという。伝統的な楚辞学では「楚王に忠誠を尽くしながらも讒言によって退けられ、祖国の衰退に絶望して入水自殺した」という屈原の伝説、及び『楚辞章句』の作者比定にしたがい、屈原の作品とされる七作品を、彼の悲憤が詠み込まれた「屈賦」として重視する。一方、それ以外の作品は屈賦の模倣だとして軽視する傾向がある。中でも漢代の七作品は、痛くもないのに呻き声を上げているような「無病の呻吟」に過ぎず、文学的価値が低いとみなされてきた。

近代に至り、屈賦七作品については、文学批評理論や歴史学、宗教学等の視点を取り入れた研究を通して、屈原の作品ではないものが含まれる可能性が指摘されるようになり、現在もなお、学界で活発な議論がおこなわれている。また、宋玉や景差の作品とされる三作品について

は、屈賦に次ぐ文学的価値を持つとして、その評価を見直そうとする動きがある。ところが、漢代の楚辞作品については、依然としてその価値を軽視する傾向が続いており、これらを取り上げた研究は少ない。

漢代の楚辞作品がこのように軽視されるのは、当該作品群が修辞・内容ともに画一的でオリジナリティに欠けると考えられているためである。しかし、そうした作品が特に漢代に数多く作られ、伝えられた背景には、その修辞や内容が時代の好尚に合致したという事情があったと考えられる。したがって、後世的な価値観を排して従来の評価を再検討し、漢代当時の社会的・文学的環境を考慮しつつ、新たな視点から分析するならば、当該作品群に楚辞研究資料としての新たな価値をみいだすことができるはずである。

そのためには、まず各作品を正確に読み解くことが前提となる。小稿は、その端緒として作成した「惜誓」の訳注である。当該作品訳注の直接の担当者は矢田であるが、原稿は上記研究メンバー全員による精査を経ている。

なお、小稿を作成する過程で得られた知見の一部は、矢田「楚辞「惜誓」試論—遊行表現を中心に—」（『東北大学中国語学文学論集』第23号、2018年）ですでに発表済みである。あわせて参照されたい。

## 凡例

○底本には洪興祖撰、白化文等点校『楚辞補注』（中華書局、2002年）を用い、四部叢刊本『楚辞補注』及び明万曆一四年馮紹祖校刊本王逸『楚辞章句』（台北・藝文印書館、1974年）を参照した。注釈内の引用については、経書は『十三経注疏附校勘記』（中文出版社、1971年）に、正史は百衲本二十四史（台湾商務印書館、1937年）に、『韓非子』は王先慎撰、鍾哲点校『韓非子集解』（中華書局、1998年）に、『淮南子』は劉文典撰、馮逸・喬華点校『淮南鴻烈集解』（中華書局、1989年）に、『説文解字』は段玉裁『説文解字注』（上海古籍出版社、1981年）に、『文選』は『足利学校藏宋刊明州本六臣注文選』（人民文学出版社、2008年）に、その他は特に注記のない限り四部叢刊本に拠った。

○押韻は羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一分冊（中華書局、2007年）所収の「兩漢詩文韻譜」に拠った。

○楚辞本文とその書き下し文は太字で示して句ごとに番号を振り、現代日本語訳と注釈を付けた。なお、紙幅に限りがあるため、解題と王逸注については書き下し文を省いた。洪興祖による補注は、必要に応じて注釈内で取り上げた。

## 【解題】

惜誓者、不知誰所作也。或曰賈誼、疑不能明也。惜者、哀也。誓者、信也、約也。言哀惜懷王、與己信約、而復背之也。古者君臣將共爲治、必以信誓相約、然後言乃從、而身曰親也。蓋刺懷王有始無終也。

「惜誓」は、誰が作ったものかわからない。賈誼が作ったという説もあるが、疑わしくて明言することはできない。「惜」は、哀しむことである。「誓」は、言葉に偽りがなく、約束することである。懷王が自分（屈原）と約束しておきながら、それに背いたことを哀しみ惜しむ、というのである。その昔、君臣は共に統治をおこなうに当たり、必ず偽りのない言葉で約束を交わし、その後でようやく意見が容れられ、親しい間柄になったのである。（「惜誓」は）懷王の首尾一貫しないさまを誹ったものであろう。

**惜誓**：徐仁甫『古詩別解』は、「誓」は「逝」の仮借字で、「惜逝」には「惜死」の意味があるとする<sup>1</sup>。また、D. ホークスは、同じ「惜」字を持つ楚辞「九章」の「惜誦」「惜往日」が、それぞれ篇首の語を題名にしたものであることに注目し、本作品もまた「惜余年老」と題すべきところ、そうになっていないのは、篇首の句の一部が失われたためだとして、現行の「惜誓」が断簡である可能性を指摘する<sup>2</sup>。

**賈誼**：洪興祖『楚辞補注』は『漢書』賈誼伝の文、及び「弔屈原賦」に含まれる「惜誓」との類似句を引き「洛陽人。文帝召爲博士、議以誼任公卿。絳灌之屬毀誼、天子亦疏之、以誼爲長沙王太傅。意不自得、及度湘水、爲賦以弔屈原。賦云、所貴聖之神德兮、遠濁世而自藏。使麒麟可係而羈兮、豈云異夫犬羊。又曰、鳳皇翔于千仞兮、覽德輝而下之。見細德之險微兮、遙增擊而去之。彼尋常之汙瀆兮、豈容吞舟之魚。橫江潭之鱣鯨兮、固將制於螻蟻。與此語意頗同」という。

**惜者、哀也**：楚辞「九章」惜誦の初句「惜誦以致愍兮」の王逸注には「惜、貪也。誦、論也。致、至也。愍、病也。言己貪忠信之道、可以安君。論之於心、誦之於口、至於身以疲病、而不能忘」とあり、ここと異なる。なお『説文解字』十下「心部」には「惜、痛也」とある。

**誓者、信也、約也**：『礼記』曲礼下篇に「諸侯使大夫問於諸侯曰聘、約信曰誓、涖牲曰盟」とある。また『説文解字』三上「言部」には「誓、約束也」とある。

<sup>1</sup> 卷二「楚辞別解」、賈誼《惜誓》解、上海古籍出版社、1984年、50頁。

<sup>2</sup> David Hawkes, *The Songs of The South: An Ancient Chinese Anthology of Poems by Qu Yuan and Other Poets*, London, Penguin Classics, 1985. p. 239.

【本文】

1 惜余年老而日衰兮 余の年老いて日び衰え

2 歳忽忽而不反 歳忽忽として反らざるを惜しむ

自身が年老いて日に日に衰え、歳月がどんどん過ぎ去って戻ってこないことが哀しい。

**王逸注** 言哀己年歳已老、氣力衰微、歲月卒過、忽然不還、而功不成、徳不立也。

自分がすでに年老いて、氣力が衰え、歳月はあっという間に過ぎ去ってしまい、二度と戻らないというのに、功績もあげられず、仁徳も備えられないことを哀しむ、というのである。

忽忽：年月の経過が速いさま。楚辞「九弁」第三章と第七章<sup>3</sup>に「歳忽忽而遒盡兮」とあり、王逸はそれぞれ「年歳逝往、若流水也」「時去唵唵、若驚馳也」と注する。また「離騷」に「日忽忽兮其將暮」、「七諫」自悲に「歳忽忽其若頽」、「九歎」惜賢に「年忽忽而日度」、「九思」哀歳に「歳忽忽兮惟暮」とあるなど、楚辞には多く用いられる。

3 登蒼天而高舉兮 蒼天に登りて高く舉がり

4 歴衆山而日遠 衆山を歴て日び遠し

青空にのぼって高くあがり、多くの山々を越えて日に日に遠ざかってゆく。

押韻：反、遠一元部上聲

**王逸注** 言己想得道真、上升蒼天、高抗志行、經歷衆山、去我郷邑、日以遠也。

自分は道真を得ようと、青空にのぼって、志や行いを高く保ち、山々を越えて、我がふるさとを離れ、日に日に遠ざかる、というのである。

高舉：高く飛ぶこと。楚辞「九弁」第五章に「鳳愈飄翔而高舉」、「九歎」遠遊に「譬彼蛟龍、乘雲浮兮…雷動電發、馭高舉兮」とあり、それぞれ鳳凰や蛟龍が天高く翔るさまを表す。

5 觀江河之紆曲兮 江河の紆曲するを觀て

6 離四海之霑濡 四海の霑濡するに離う

江河の曲がりくねる様子を見て、四方の海の水にこの身を濡らす。

---

<sup>3</sup> 「九弁」の章分けは底本にしたがった。

**王逸注** 言己遂見江河之紆曲、志爲盤結、遇四海之風波、衣爲濡溼。心愁身苦、憂悲且思也。

自分はそこで江河の曲がりくねるの様子を目にすると、胸は塞がり、四海の風や波を身に受けると、衣服は濡れそぼつ。身も心も愁い苦しんで、悲しみ思い悩む、というのである。

**紆曲**：曲がりくねること。第22句にも「山川之紆曲」とある。

**霑濡**：水に濡れそぼつこと。『詩経』小雅「蓼蕭」第三章「蓼彼蕭斯、零露泥泥」の毛伝に「泥泥、霑濡也」とある。

7 攀北極而一息兮                      北極に攀じて一たび息い

8 吸沆瀣吕充虚                      沆瀣を吸いて吕て虚を充たす

北極の星によじのぼって一休みし、夜半の気を吸って空腹を充たす。

**王逸注** 言己周流行求道真、冀得上攀北極之星、且中休息、吸清和之氣、以充空虚、療飢渴也。

自分はあまねくめぐり歩いて道真を求め、天に昇って北極の星によじのぼり、しばらく途中で休憩し、清く穏やかな気を吸って、空腹を満たし、飢えや渴きを癒やしたい、というのである。

**北極**：北極の星。洪興祖『楚辞補注』は『晋書』天文志上の文を引き「北極五星、天運無窮、三光迭耀、而極星不移。故曰居其所而衆星共之」とする。

**沆瀣**：北方の夜半の気。仙人が飲むもの。楚辞「遠游」に「餐六氣而飲沆瀣兮、漱正陽而含朝霞」とあり、王逸注は『陵陽子明經』（佚書、『隋書』経籍志、子部医方に「陵陽子説黄金秘法一卷」あり）の文を引いて「春食朝霞。朝霞者、日始欲出赤黄氣也。秋食淪陰。淪陰者、日没以後赤黄氣也。冬飲沆瀣。沆瀣者、北方夜半氣也。夏食正陽。正陽者、南方日中氣也。并天地玄黄之氣、是爲六氣也」という。

9 飛朱鳥使先驅兮                      朱鳥を飛ばせて先驅せしめ

10 駕太一之象輿                      太一の象輿に駕す

朱雀を飛ばせて先導させ、象牙で飾った太一神の車を走らせる。

**王逸注** 言己吸天元氣、得其道真。卽朱雀神鳥爲我先導、遂乘太一神象之輿、而遊戲也。

自分は天の元気を吸って、その道真を得た。そこで神鳥である朱雀に先導させ、象牙で飾っ

た太一神の神聖な車に乗り、遊覧しよう、というのである。

**朱鳥**：赤色の鳥。南方を象徴する神鳥、朱雀。『淮南子』天文篇に「南方火也。其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏。其神爲熒惑。其獸朱鳥也」とあり、高誘注に「朱鳥、朱雀也」とある。

**太一**：天神の名。また、星の名。『史記』封禪書に「亳人謬忌奏祠太一方曰、天神貴者太一。太一佐曰五帝」とあり、『史記索隱』は緯書『樂汁徵凶』と『春秋佐助期』を引いて「樂汁徵圖曰、天宮、紫微。北極、天一・太一。宋均云、天一・太一、北極神之別名。春秋佐助期曰、紫宮、天皇曜魄寶之所理也。石氏云、天一、太一、各一星、在紫宮門外、立承事天皇大帝」とする。

**象輿**：象牙で飾った車。楚辞「離騷」に「爲余駕飛龍兮、雜瑤象以爲車」とあり、王逸注は「象、象牙也」という。また『漢書』司馬相如伝上の「天子遊獵賦」に「青龍蚺蟺於東箱、象輿婉僎於西清」とあり、顔師古注に「象輿、瑞應車也」とある。司馬相如伝下の「大人賦」にも「駕應龍象輿之螭略委麗兮、驂赤螭青虬之蚺蟺宛蜒」とある。また『韓非子』十過篇には「昔者、黃帝合鬼神於泰山之上、駕象車而六蛟龍、畢方竝蹇、蚩尤居前」とある。

11 蒼龍蚺虬於左驂兮 蒼龍は左驂に蚺虬し

12 白虎騁而爲右駢 白虎は騁せて右駢と爲る

蒼龍は車の左のそえうまとなって体をくねらせ、白虎は車の右のそえうまとなって駆ける。

**王逸注** 言己徳合神明、則駕蒼龍、騁白虎、其狀蚺虬有威容也。

自分の仁徳は神明のそれと合致するため、青龍を車につけ白虎をそえうまにする。その隊列の様子はうねうねとして威厳がある、というのである。

**蒼龍・白虎**：それぞれ東方と西方を象徴する神獣。『淮南子』兵略篇に「所謂天數者、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武」とあり、許慎注に「角亢爲青龍、參井爲白虎、星張爲朱雀、斗牛爲玄武。用兵者、右參井、左角亢、背斗牛、向星張。此順北斗之銓衡也」とある。『礼記』曲礼上篇にも「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎、招揺在上、急繕其怒」とある。いずれも行軍の隊形を、四神とそれによって示される方角や天体によって表したものと考えられる。ここでも同様に作中主体の隊列を表しているのであろう。

13 建日月目爲蓋兮 日月を建てて目て蓋いと爲し

14 載玉女於後車 玉女を後車に載す

太陽と月の光を車の蓋いとし、仙女の玉女を後ろの車に乗せて付きしたがわせる。

**王逸注** 言己乃立日月之光、以爲車蓋、載玉女於後車、以侍棲宿也。

日月の光を立てて車の蓋いとし、玉女を後ろの車に乗せて、連れ帰って住まいに侍らせる、  
というのである。

**載玉女**：仙女である玉女を車に乗せる。洪興祖『楚辭補注』は、司馬相如「大人賦」の「**載玉女而與之歸**」及び『史記正義』が引く張揖注「玉女、青要・乗弋等也」を引く。また、『文選』卷十五の張衡「思玄賦」に「載太華之玉女兮、召洛浦之宓妃」とあり、李善注は『列仙伝』巻下の「毛女」の条を引いて「列仙傳曰、毛女者、字玉姜、在華陰山中。體生毛。所止巖中、有鼓琴聲」と言う。劉良注は「玉女、太華神女」とする。

15 馳驚於杳冥之中兮 杳冥の中に馳驚し

16 休息處崑崙之墟 崑崙の墟に休息す

暗く何も見えない中を疾走し、崑崙山で休憩する。

押韻：濡、虚、輿、車、墟一魚部平声

**王逸注** 言己雖馳驚杳冥之中、脩善不倦、休息崑崙之山、以遊觀也。

自分は暗闇の中を走っていても、飽きることも無く善を実行し、崑崙山で休息しつつ、遊覧する、  
というのである。

**杳冥**：暗くて何も見えないさま。楚辞「九歌」東君に「撰余轡兮高駝翔、杳冥冥兮以東行」とあり、王逸注に「言日過太陰不見其光、出杳杳、入冥冥、直東行而復出」とある。また「九歌」山鬼に「表獨立兮山之上、雲容容兮而在下。杳冥冥兮羌晝晦、東風飄兮神靈雨」とあり、王逸注に「言山鬼所在至高邈、雲出其下。雖白晝猶暝晦也」とある。

**崑崙之墟**：崑崙山のこと。洪興祖『楚辭補注』は『説文解字』八上「丘部」の文を引き「虚、大丘也。崑崙丘、或謂之崑崙墟」と言う<sup>4</sup>。

17 樂窮極而不厭兮 楽しみ窮極なれども厭かず

18 願從容處神明 神明に従容するを願う

<sup>4</sup>『説文解字』八上「丘部」に「虚、大丘也。崑崙丘謂之崑崙墟」とあり、段玉裁注に「崑崙丘、丘之至大者也。…按、虚者、今之墟字。猶崑崙今之崑崙墟也。虚本謂大丘。大則空曠、故引伸之爲空虚」とある。

楽しみを極め尽くしても飽きることはなく、さらに神々の世界をゆったりと周遊することを願う。

**王逸注** 言己周行觀望、樂無窮極、志猶不厭、願復與神明俱遊戲也。

自分はあまねくめぐって遊覧し、楽しみはきわまることがないが、まだ飽き足らず、神々とともに遊ぶことを願う、というのである。

**従容**：ゆったりと周遊するさま。『莊子』秋水篇に「儵魚出遊従容、是魚之樂也」と、『文選』卷十六の司馬相如「長門賦」に「下蘭臺而周覽兮、歩従容於深宮」とある。楚辞「九章」悲回風には「寤従容以周流兮、聊逍遙以自恃」とあり、王逸注は「覺立徙倚而行歩也。且徐遊戲内自娛也」とする。また「九歎」憂苦には「遵壑莽以呼風兮、歩従容於山廡」とあり、王逸注は「言己循山野之中、以呼風俗之人、欲語以忠正之道、故徐歩山隈、遊戲以須之也」とする。「九思」傷時には「且従容兮自慰、玩琴書兮遊戲」とあり、王逸注は「以古賢者皆然、緩己憂也」とする。

19 涉丹水而駝騁兮 丹水<sup>わた</sup>を涉りて駝騁し

20 右大夏之遺風 大夏を右にして之れ遺風のごとし

（崑崙山の東南の隅から流れ出る）丹水を渡って車を走らせ、（遠い西方にある）大夏国を右手に見ながら疾風のように駆ける。

**王逸注** 丹水、猶赤水也。淮南言赤水出崑崙也。大夏、外國名也。在西南。言己復渡丹水而馳騁、顧見大夏之俗、思念楚國也。

「丹水」は、赤水のようなものである。『淮南子』に「赤水は崑崙山から流れ出ている」とある。「大夏」とは、外国の名で、西南にある。自分はまた丹水を渡って駆け、大夏国の風俗を目にして、楚国のことを思い出す、というのである。

**丹水**：崑崙山の東南の隅から流れ出るという伝説上の川の名。王逸注に「丹水、猶赤水也」とあることについて、黄靈庚『楚辞章句疏証』は「周、秦曰赤水，兩漢曰丹水，古今別稱」と言う<sup>5</sup>。「赤水」は、楚辞「離騷」の主人公靈均が西方の崑崙山に向かう場面に「忽吾行此流沙兮、遵赤水而容與」と見え、王逸注には「赤水、出崑崙山」とある。『淮南子』墜形篇には

<sup>5</sup> 増訂本第六冊「惜誓」、2018年、3008頁。

「何謂六水。曰、河水・赤水・遼水・黒水・江水・淮水。…河水出崑崙東、北阪貫渤海、入禹所導積石山。赤水出其東南阪、西南注南海」と、「赤水」が崑崙山の東南の隅から流れ出ることが記されている。「丹水」という名の川は、『淮南子』隴形篇に「丹水出高楮」（高誘注は「高楮、一名冢領山、在京兆上雒、丹水所出」とする）、兵略篇に「堯戰於丹水之浦、以服南蠻」（許慎注は「丹水在南陽」とする）とあり、『山海經』にも南山經に「又東五百里、曰丹穴之山、其上多金玉。丹水出焉、而南流注于渤海」、西山經に「又西五十二里、曰竹山…丹水出焉、東南流注于洛水」、「又西百七十里、曰南山、上多丹粟。丹水出焉、北流注于渭」、「又西北四百二十里、曰崧山…丹水出焉、西流注于稷澤」、北山經に「又東二百里、曰虫尾之山。其上多金玉、其下多竹、多青碧。丹水出焉、南流注于河」とあるなど、伝世文献中に数多く見られる。しかし上句 16 に「崑崙の墟に休息す」とあることから、ここの「丹水」は「離騷」の「赤水」と同じく、崑崙山から流れ出るとされる伝説上の川であると思われる。

**大夏**：西方の僻遠にある国。『淮南子』隴形篇に「九州之外、乃有八殫、亦方千里。…西北方曰大夏、曰海澤。…凡八殫八澤之雲、是雨九州」とあるが、これは高誘注に「殫、猶遠也」とあることから、西北の遠い地を指して「大夏」と言っているのだと考えられる。『史記』大宛列伝には「大夏在大宛西南二千餘里、媯水南。其俗土著有城屋、與大宛同俗。無大王長、往往城邑置小長。其兵弱、畏戰。善賈市」と、国名としての「大夏」の記述がある。

**遺風**：疾風のこと。王逸注は「顧見大夏之俗」とし、「遺風」を「遺された風俗」と解しているようである。黄靈庚『楚辭章句疏証』はそれを非とし、『呂氏春秋』孝行覽「本味」の「馬之美者、青龍之匹・遺風之乘」及び高誘注の「匹・乘、皆馬名」、『文選』卷七の司馬相如「子虛賦」の「乘遺風、射游騏」及び李善が引く張揖注「遺風、千里馬也」を引く。加えて『史記』大宛列伝に「大夏」について「與大宛同俗」とあることから、汗血馬の産地である大宛と同様に大夏も駿馬の産地であったとし、「遺風」を「千里馬之別稱」と見て、20 を「謂左駕大夏駿馬也」と解する<sup>6</sup>。しかし「大夏」が大宛と同じく駿馬の産地だという記述は史書に見えない。『文選』卷四七の王褒「聖主得賢臣頌」に「縱騁馳驚、忽如景靡。過都越國、蹶如歷塊。追奔電、逐遺風」とあり、李善注が「遺風、風之疾者也」とすること、『文選』卷七の揚雄「甘泉賦」に「屯萬騎於中營兮、方玉車之千乘。聲駢隱以陸離兮、輕先疾雷而馭遺風」とあり、呂向注に「言車騎之速、過於疾電、馳及遺風也」とあることから、「遺風」は疾風を指し、ここでは疾風の如く速く疾走することを表すと思われる。

## 21 黄鵠之一舉兮

## 黄鵠のごとく一たび舉がれば

<sup>6</sup> 前掲注 5、3009 頁。

22 知山川之紆曲 山川の紆曲を知り

23 再舉兮 再び舉がれば

24 睹天地之圜方 天地の圜方<sup>み</sup>を睹る

黄鵠のように一たび飛び上がると、山や川の曲がりくねった様子が見え、再び飛び上がると、丸い天や四角い地が見えた。

**王逸注** 言黄鵠養其羽翼、一飛則見山川之屈曲、再舉則知天地之圜方。居身益高、所睹愈遠也。以言賢者亦宜高望遠慮、以知君之賢愚也。

黄鵠はその翼を大切にし、一たび飛び上がれば山や川などの曲がりくねった様子を見ることができ、再び飛び上がれば丸い天や四角い地の形を知ることができる。高く飛べば飛ぶほど、遠くまで見ることができる、というのである。賢者もまた高所から遠くを望んで遠くまで見通し、君主の賢愚を知るべきだというのである。

**黄鵠**：大鳥の名。第 35、39 句にもある。洪興祖『楚辞補注』は『漢書』昭帝紀の始元元年二月の文及び顔師古注を引き「始元中、黄鵠下建章宮太液池中。師古云、黄鵠、大鳥。一舉千里。非白鵠也」とする。

25 臨中國之衆人兮 中國の衆人を臨み

26 託回颺乎尚羊 回颺に託して尚羊す

中つ国の人々を見下ろし、つむじ風に身を任せてゆったりと周遊する。

**王逸注** 尚羊、遊戯也。言己臨見楚國之中、衆人貪佞、故託回風、遠行遊戯也。

「尚羊」は、遊び回ることである。自分が楚国の中を見てみると、人々はみな貪欲で口達者な者ばかりである。そのため、つむじ風に身を任せ、遠く遊び回る、というのである。

**回颺**：つむじ風。「回颺」「回森」に同じ。『漢書』揚雄伝上の「甘泉賦」に「回森肆其碣駭兮、掖桂椒、鬱穆楊」とあり、顔師古注は「回森、回風也」とする。

**尚羊**：ゆったりと周遊するさま。「相羊」「倘佯」に同じ。楚辞「離騷」に「聊逍遙以相羊」とあり、王逸注は「逍遙、相羊、皆遊也」とする。

27 乃至少原之壑兮 乃ち少原の壑に至れば

28 赤松王喬皆在旁 赤松・王喬は皆な旁に在り

そのようにして少原の野にやってみると、仙人の赤松子と王子喬がそろって側にやってきた。

**王逸注** 少原之壑、仙人所居。言遂至衆仙所居、而見赤松子與王喬也。

「少原の壑」は、仙人の居る所である。かくて仙人たちの居る所に至り、赤松子と王子喬に会った、というのである。

**少原之壑**：未詳。『韓詩外伝』巻九に「孔子出遊少源之野。有婦人中澤而哭。其音甚哀。孔子使弟子問焉曰、夫人何哭之哀。婦人曰、郷者刈著薪、亡吾著簪。吾是以哀也。弟子曰、刈著薪而亡著簪、有何悲焉。婦人曰、非傷亡簪也。蓋不忘故也」とあり、『芸文類聚』巻六、地部「野」<sup>7</sup>、及び『太平御覧』巻五五、地部二十「野」<sup>8</sup>に同文を引いて「少原の野」に作る。

**赤松・王喬**：伝説上の仙人である赤松子と王子喬。楚辞「遠遊」に「聞赤松之清塵兮、願承風乎遺則」「見王子而宿之兮、審壹氣之和徳」とある。洪興祖『楚辞補注』は『淮南子』泰族篇の文を引き「王喬・赤松去塵埃之間、離羣慝之紛、吸陰陽之和、食天地之精、蹠虚輕舉、乘雲游霧」という。

29 二子擁瑟而調均兮                      二子 瑟を擁して調均すれば

30 余因稱乎清商                              余 因りて清商<sup>あ</sup>を稱ぐ

彼らが瑟を手にして弦の調子を調えたので、私は清商の曲を演奏した。

**王逸注** 均、亦調也。清商、歌曲也。言赤松・王喬見己歡喜、持瑟調弦而歌。我因稱清商之曲最爲善也。

「均」も調えるという意味である。「清商」は歌曲である。赤松子・王子喬が自分に会って喜び、瑟を持ってきて調弦して歌ったので、私は清商の曲が最も良いと称えた、というのである。

**調均**：瑟の弦を調律すること。洪興祖『楚辞補注』は『国語』周語下の「律者、所以立均、出度也」という伶州鳩の言葉を引く。

**稱**：王逸注は「称える」の意にとるが、王夫之『楚辞通积』は「稱、奏也」と<sup>9</sup>、王泗原『楚

<sup>7</sup> 『宋本藝文類聚』、上海古籍出版社、2013年、上冊、178頁。

<sup>8</sup> 上海涵芬樓影印宋本複製重印本、中華書局、1960年、第一冊、268頁。

<sup>9</sup> 岳麓書社、2011年、432頁。

辞校釈』も「稱，舉，“舉樂”的舉。王注以爲稱説，非」として<sup>10</sup>、いずれも「演奏する」意に解する。前句との繋がりから見て「演奏する」と解する方が適切であろう。

**清商**：音律の商の音。古代五音の一つで、その調子は澄んでいてさみしげだという。『韓非子』十過篇に「平公問師曠曰、此所謂何聲也。師曠曰、此所謂清商也。公曰、清商固最悲乎。師曠曰、不如清徵」とある。

31 澹然而自樂兮 澹然として自ら楽しみ

32 吸衆氣而翱翔 衆氣を吸いて翱翔す

心安らかに楽しみ、さまざまな気を吸って気ままに駆け回った。

**王逸注** 衆氣、謂朝霞・正陽・淪陰・沆瀣之氣也。言己得與松喬相對、心中澹然而自欣樂、俱吸衆氣而遊戲。

「衆氣」とは、朝霞・正陽・淪陰・沆瀣の気のことである。自分は、赤松子・王子喬と一緒にいることができ、心の中が静かに安定して楽しくなったため、彼らとともに衆氣を吸って遊び楽しむ、というのである。

**澹然**：心静かに安定したさま。『韓非子』大体篇に「因道全法、君子樂而大姦止。澹然閒靜、因天命持大體」とある。また『文選』卷九の揚雄「長楊賦」に「使海内澹然、永無邊城之災」とあり、李善注に「廣雅曰、澹、安也」と、李周翰注に「謂晏然無事」とある。楚辞「九歎」愍命には「心溶溶其不可量兮、情澹澹其若淵」とあり、王逸注には「澹澹、不動貌也」とある。

**翱翔**：鳥が飛び回るように、気ままに駆け回ること。『詩經』齊風「載駟」第三章に「魯道有蕩、齊子翱翔」とあり、毛伝に「翱翔、猶彷徨也」とある。また檜風「羔裘」第二章に「羔裘翱翔、狐裘在堂」とあり、鄭箋に「翱翔、猶逍遥也」とある。『漢書』司馬相如伝上が引く「天子遊獵賦」に「於是楚王乃弭節徘徊、翱翔容與」とあり、郭璞注は「翱翔容與、言自得也」とする。

33 念我長生而久僊兮 念<sup>おも</sup>うに我れ長生<sup>おん</sup>にして久しく僊<sup>うつ</sup>るは

34 不如反余之故郷 余の故郷<sup>かえ</sup>に反<sup>し</sup>るに如かずと

しかし考えてみると私は長寿を得て仙人になるより、自分の故郷に帰る方が良いのだ。

押韻：明、風、方、羊、旁、商、翔、郷一陽侵合韻

<sup>10</sup> 人民教育出版社、1999年、315頁。

**王逸注** 言屈原設去世離俗、遭遇真人、雖得長生久僊、意不甘樂、猶思楚國、念故鄉。忠信之至、恩義之篤也。

屈原は仮の世界の中で俗世を離れて、真人に遭遇し、不老長生の仙人になることができたものの、心の中ではその楽しみに甘んずることができず、やはり楚国のことを思い、故郷を懐かしんだ、というのである。忠誠心や、恩義に対する気持ちが極めて篤いのである。

35 黄鵠後時而寄處兮 黄鵠 時に後<sup>おく</sup>れて寄處すれば

36 鷗臯羣而制之 鷗臯 羣れて之れを制す

黄鵠のように優れた鳥も飛び立つ時を逸して地上に留まったままでいれば、ミミズクやフクロウのような悪鳥が寄ってたかって邪魔をする。

**王逸注** 言黄鵠一飛千里、常集高山茂林之上、設後時而欲寄處、則鷗臯羣聚、禁而制之、不得止也。言賢者失時後輩、亦爲讒佞所排逐。

黄鵠は一度に千里を飛ぶことができ、常に高い山の林の上に集まるが、もし時間に遅れて巣に戻ろうとすれば、ミミズクやフクロウが群れ集まって、その邪魔をするため、巣にとどまることができなくなってしまう、というのである。賢者も時を逸して群れに遅れれば、邪悪な者たちに追い出されてしまう、というのである。

**鷗臯**：ミミズクやフクロウの類。『史記』屈原賈生列伝が引く「弔屈原賦」に「鸞鳳伏竄兮、鷗臯翱翔」とある。また『史記』日者列伝に「子獨不見、鷗臯之與鳳皇翔乎蘭芷」とある。いづれも悪鳥として、神鳥や瑞鳥と対比される。

37 神龍失水而陸居兮 神龍 水を失いて陸居すれば

38 爲螻蟻之所裁 螻蟻の裁する所と爲る

神聖な龍も水を失って陸に上がってしまえば、ケラやアリのような虫の害を被る。

**王逸注** 螻、螻蛄也。蟻、蚍蜉也。裁、制也。言神龍常潛深水、設其失水、居於陵陸之地、則爲螻蟻・蚍蜉所裁制、而見啄齧也。以言賢者不居廟堂、則爲俗人所侵害也。

「螻」は、「螻蛄（ケラ）」のことである。「蟻」は、「蚍蜉（アリ）」のことである。「裁」は、「制する」ことである。神聖な龍は常に深い水の中に潜っているが、もし水を失って、陸の上にいれば、ケラやアリに捕まって、囓られてしまう、というのである。賢者も朝廷内にいなければ、俗人から害を受けるといのである。

神龍失水・爲螻蟻之所裁：神聖な力を持つ龍も、水から出れば、その力を発揮できず、ちっぽけな虫に脅かされるということ。洪興祖『楚辭補注』は『管子』形勢解の「蛟龍、水蟲之神者也。乗於水則神立、失於水則神廢」及び『莊子』庚桑楚篇の「吞舟之魚碭而失水、則蟻能苦之」を引く。また『史記』屈原賈生列伝が引く賈誼「弔屈原賦」に「彼尋常之汙瀆兮、豈能容吞舟之魚。橫江湖之鱸鱣兮、固將制於螻蟻」とある。

39 夫黄鵠神龍猶如此兮 夫れ黄鵠・神龍すら猶お此くの如し

40 況賢者之逢亂世哉 況んや賢者の亂世に逢うをや

黄鵠や神龍でさえそうなのだから、乱世に生まれ合わせてしまった賢者は言うまでもない。  
押韻：之、裁、哉一之部平声

**王逸注** 言黄鵠能飛翔、神龍能存能亡、奄然失所、爲鷗梟・螻蟻所制、其困如此。何況賢者、身無爵祿、爲俗人所困侮、固其宜也。

黄鵠は飛翔することができ、神聖な龍は姿を現したり隠したりすることができるが、突然に居場所を失ってしまうと、ミミズクやフクロウ、ケラ・アリの害を被って、このように苦しむのである。ましてや賢者が、爵祿を持っていなければ、俗人に苦しめられ侮られるのは、当然である、というのである。

41 壽冉冉而日衰兮 壽は冉冉として日び衰え

42 固儻回而不息 固より儻回して息まず

どんだん年をとって日に日に衰えていき、(年月は)めぐりとどまることがない。

**王逸注** 儻回、運轉也。言己年壽日以衰老、而楚國羣臣承順君非、隨之運轉、常不止息也。

「儻回」は、めぐり回ることである。自分の寿命は日に日に衰え老いてくが、楚国の群臣は君主の間違った考えに服従し、それにしがたってめぐり回って、いつまでもとまらない、というのである。

冉冉：だんだん進行するさま。楚辭「離騷」に「老冉冉其將至兮、恐脩名之不立」とあり、王逸注は「冉冉、行貌」とする。

儻回：めぐり回ること。楚辭「九章」惜誦に「欲儻回以干際兮、恐重患而離尤」とあり、王逸注は「儻回、猶低回也」とする。また「九章」涉江に「入溱浦余儻回兮、迷不知吾所如」と、「九章」思美人に「吾且儻回以娛憂兮、觀南人之變態」とある。

43 俗流從而不止兮

俗は流從して止まず

44 衆枉聚而矯直

衆枉は聚りて直を矯む

俗人は流れにしたがうばかりであり、邪な者たちは寄ってたかって真っ直ぐなものを曲げようとする。

押韻：息、直一職部

**王逸注** 枉、邪也。矯、正也。言楚國俗人流從諂諛、不可禁止、衆邪羣聚、反欲正忠直之士、使隨之也。

「枉」は、邪なことである。「矯」は、正すことである。楚国の俗人たちは、世の中の流れにしたがって阿諛するが、それをとめることはできない。多くの邪な者たちは寄ってたかって、忠直の人士を逆に矯正し、自分たちにしたがわせようとする、というのである。

**俗流從**：俗人が世の中の流れにしたがうこと。王逸は、43については、「俗」を主語、「流從」を動詞と取る一方、44については、「衆枉」を主語、「聚」を動詞と取っている。これに対し王四原『楚辭校釈』は、43・44は対句で、「俗流」と「衆枉」がそれぞれの主語、「從」「不止」と「聚」「矯直」が動詞であるという<sup>11</sup>。しかし、楚辭「離騷」に「固時俗之流從兮、又孰能無變化」とあることから、ここでも「流從」を動詞と取るべきであろう。

**衆枉**：多くの邪な小人たち。『淮南子』詮言篇に「故處衆枉之中、不失其直。天下皆流、獨不離其壇域」と、説山篇に「衆曲不容直、衆枉不容正」とある。また『漢書』劉向伝に「君子獨處守正、不撓衆枉」とあり、顔師古注に「不爲衆曲而自屈也」とある。

**矯直**：本来は、曲がったものを真っ直ぐになおすことであるが、ここではそれが「衆枉」によってなされることから、逆に真っ直ぐなものが曲げられてしまうことを言う。本来の意味での使用例としては『韓非子』外儲説右下の経四に「是以説在椎鍛平夷、榜繫矯直」とあり、説四に「椎鍛者、所以平不夷也。榜繫者、所以矯不直也。聖人之爲法也、所以平不夷、矯不直也」とある。

45 或偷合而苟進兮

或いは偷合して苟に進み

46 或隱居而深藏

或いは隱居して深く藏る

ある者は迎合してかりそめの榮達を手にし、ある者は世を離れて深く身を隠す。

<sup>11</sup> 前掲注 10、316 頁。

**王逸注** 言士有偷合於世、苟欲進取、以得爵位、或有修行德義、隱藏深山、而君不照知也。

士の中には世俗に迎合して、それによって榮達して、爵位を得る者がいれば、また徳義を実行し、山奥に隠れて君主から知られることがない者もいる、というのである。

**偷合而苟進**：他人に迎合することによって立身出世すること。『荀子』臣道篇に「不邇君之榮辱、不邇國之臧否、**偷合苟容**、以持祿養交而已耳、謂之國賊」とある。

47 苦稱量之不審兮

稱量の審らかならず

48 同權槩而就衡

權・槩を同じくして衡に就かしむるに苦しむ

物の重さや量のはかり方が精密でなく、分銅や斗搔き棒を等しくして釣り合わせてしまっていることが悩ましい。

押韻：藏、衡一陽部平声

**王逸注** 稱所以知輕重、量所以別多少。槩、平也。權・衡、皆稱也。言患苦衆人、稱物量穀、不知審其多少、同其稱平、以失情實、則使衆人怨也。以言君不稱量士之賢愚、而同用之、則使智者恨也。

「<sup>はか</sup>稱る」とは重さを知る方法、「<sup>なら</sup>量る」とは多寡を分ける方法である。「<sup>かな</sup>槩す」とは、平らにするということである。「<sup>かな</sup>權」と「<sup>かな</sup>衡」は、どちらも「<sup>かな</sup>稱う（つり合う）」ことである。人々が物の重さをはかり、穀物の量をはかっても、その多寡をはっきりさせられず、はかりをつり合わせてしまうため、実情が分からなくなり、人々は怨みを抱くようになる。そのことに苦しむ、というのである。君主が士人の賢愚を知らず、誰も彼も同じように用いて、智者に恨まれることをいうのである。

**稱量**：物の重さをはかること（稱）と、物の量をはかること（量）。『管子』枢言篇に「**量**之不<sup>以</sup>少多、**稱**之不<sup>以</sup>輕重、**度**之不<sup>以</sup>短長。不審此三者、不可舉大事」とある。

**權槩**：物の重量をはかるための分銅（權）と、枘に入れた穀物の表面を平らにならず斗搔き棒（槩）。『礼記』月令に「仲春之月…日夜分、則同度量、鈞衡石、角斗甬、**正權槩**」とあり、鄭玄注は「稱錘曰權。槩、平斗斛者」とする。王逸注は「槩」「權」ともに動詞と取っているようであるが、洪興祖『楚辭補注』は「權、稱錘也。槩、平斛木也」とし、朱熹『楚辭集注』はそれを「權、槩、皆所以取平也」と補う。

49 或推逶而苟容兮

或いは推逶して苟に容れられ

50 或直言之諤諤

或いは直言すること諤諤たり

ある者は自らの考えを曲げてかりそめに上位の者に取り入り、ある者は憚らずに直言する。

**王逸注** 言臣承順君非、可推可逐、苟自容入以得高位。有直言諤諤、諫正君非、而反放弃之也。

臣下が君主の非に追従し、自分を変えることができれば、かりそめに取り入って高位にのぼることができる。憚ることなく直言し、諫めて君主の非を正す者がいても、逆にそうした人物を放逐する、というのである。

**推逐**：変化すること。『礼記』王制篇に「中國戎夷、五方之民、皆有性也、不可**推移**」とある。

**苟容**：他人の言いなりになって取り入ること。『文選』卷十五の張衡「思玄賦」に「不抑操而**苟容**兮、譬臨河而無航」とあり、呂向注に「不抑操行而且容於代、如臨河而無舟可渡也」とある。第45句の注釈も参照。

**諤諤**：直言するさま。『史記』商君列伝に「千人之諾諾、不如一士之**諤諤**」と、『韓詩外伝』卷十に「有**諤諤**争臣者、其國昌。有默默諛臣者、其國亡」とある。

51 傷誠是之不察兮

誠是の察らかならず

52 并紉茅絲以爲索

茅・絲を并せ**紉**びて以て索と爲すを**傷**む

偽りのなさや正しさが評価されず、茅と絹糸を一本に結び合わせて繩としてしまっていることが悲しい。

**王逸注** 單爲紉、合爲索。言己誠傷念君待遇苟合之人與忠直之士、曾無別異、猶并紉絲與茅共爲索也。

一本のものを「紉」といい、合わせたものを「索」という。かりそめに上位者に取り入る者と忠直の士人とを、君主が区別なく扱い、それがまるで絹糸と茅と一緒に撚り合わせて繩に絢うようである。自分はそのことが誠に残念である、というのである。

**誠是**：偽りのないことと正しいこと。青木正児『新訳楚辞』は「是は正しいこと。然し王逸の註に「己誠傷念」云々と有るによつて考へると、本文は或は「誠傷是之不察」と有つたのかも知れぬ。さすれば是はコレと代名詞に讀むべきであらう」と述べる<sup>12</sup>。黄靈庚『楚辞異文弁証』

<sup>12</sup> 春秋社、1957年、「惜誓」393頁。

も同様に、王逸注を根拠として、本文は本来「誠傷是之不察兮」に作っていたとする<sup>13</sup>。しかし 45-48 と 49-52 は 4 句ずつの対偶になっていると考えられ、51「傷」「誠是」は 47「苦」「稱量」とそれぞれ対になる。したがって「稱量」と同様に「誠是」も同義複合語と解するべきであろう。なお、王夫之『楚辞通釈』は「誠是，是非之實也」とし<sup>14</sup>、徐仁甫『古詩別解』は「是即寔，亦即實。誠是，誠實也。傷誠是之不察，謂悲誠實之人不被察知也」とする<sup>15</sup>。

**茅絲**：茅と絹糸。楚辞「九思」悼亂に「茅絲兮同綜、冠履兮共紉」とあり、王逸注は「不別好惡、上下無別」とする。

**紉**：長い繊維状のものをつなぎ合わせて縄にすること。楚辞「離騷」に「扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩」とあり、王逸注に「紉、索也」とある。また同じく「離騷」に「矯菌桂以紉蕙兮、索胡繩之纏纏」とある。『説文解字』十三上「糸部」に「紉、單繩也」とあり、段玉裁注は「凡言綸、言紉、皆合三股・二股爲之。紉則單股爲之…蓋單股必以他股連接而成」とする。これにしたがえば、「紉」は一本のものを撚って、つなぎ合わせて作った縄、また、そのようにして縄を作ること。

**索**：縄のこと。『説文解字』六下「市」部に「索、艸有莖葉、可作繩索」とあり、段玉裁注に「當云『索、繩也』、與糸部『繩、索也』爲轉注」とある。

53 方世俗之幽昏兮                    方に世俗の幽昏なる

54 眩白黒之美惡                    白黒と美惡とに眩う

今、人々は闇黒の乱世で、白いものと黒いもの、美しいものと醜いものが見分けられない。

**王逸注** 幽昏、不明也。眩、惑也。言方今之世、君臣不明、惑於貪濁、眩於白黒、不能知人善惡之情也。

「幽昏」とは、賢明でないことである。「眩」は、惑うことである。今の世の中では、君臣ともに賢明ではなく、欲に目がくらみ、白黒の区別がつかず、人の心の善悪がわからない、というのである。

**幽昏**：「幽」「昏」ともに暗いこと。『国語』楚語上に「教之世、而爲之昭明德、而廢幽昏焉」とあり、韋昭注は「幽、闇也。昏、亂也。爲之陳有明德者世顯、而闇亂者世廢也」とする。

<sup>13</sup> 中州古籍出版社、2000年、758頁。

<sup>14</sup> 前掲注9、432頁。

<sup>15</sup> 前掲注1、50-51頁。

55 放山淵之龜玉兮 山淵の龜玉を放ち

56 相與貴夫礫石 相い與<sup>とも</sup>に夫の礫石を貴しとす

山や淵の神聖な亀や貴重な玉を捨てて、皆がそろって石ころを後生大事にする。

押韻：諤、索、惡、石—鐸部

**王逸注** 龜可以決吉凶、故人亦珣之。放、弃也。小石爲礫。言世人皆弃崑山之玉、大澤之龜、反相與貴重小石也。言闇君貴佞僞、賤忠直也。

亀で吉凶を決めることができる。そのため人はこれを宝とみなす。「放」は、棄てることである。小石を「礫」という。世の人々はみな崑崙山の玉や大沢の亀を棄てて、そろって小石を大切にす、というのである。暗君が、阿ったり偽ったりする者の言うことを聞き、忠直の臣をないがしろにすることをいうのである。

**龜玉**：亀の甲羅と玉。古代中国ではともに国の重宝とされた貴重なもの。『論語』季子篇に「虎兇出於柙、龜玉毀於櫝中、是誰之過與」とある。また『礼記』玉藻に「執龜玉、舉前曳踵、蹢躅如也」とある。

**礫石**：小さな石ころ。『韓詩外伝』卷三に「夫太山不讓礫石、江海不辭小流、所以成其大也」とある。

57 梅伯數諫而至醢兮 梅伯は數しば諫めて醢せらるるに至り

58 來革順志而用國 來革は志に順いて國<sup>おさ</sup>を用む

梅伯は何度も（殷の紂王を）諫めたために醢にされ、來革（悪来）は（紂王の）意向に沿ったために国の権力を握った。

**王逸注** 已解於離騷經。來革、紂佞臣也。言來革佞諛、從順紂意、故得顯用、持國權也。

（梅伯のことは）すでに「離騷經」で説明した。來革（悪来）は殷の紂王の佞臣である。來革は阿り諂い、紂王の意向にしたがったため、重用されて、国の権力を握ることができた、というのである。

\* 「離騷」の「后辛之菹醢兮、殷宗用之不長」の王逸注に「后、君也。辛、殷之亡王紂名也。藏菜曰菹、肉醬曰醢。言紂爲無道、殺比干、醢梅伯。武王仗黃鉞、行天罰、殷宗遂絶、不得長久也」とある。

**梅伯**：殷の紂王の臣で、しばしば諫言したために紂王に殺されたという。『韓非子』難言篇に「故文王説紂而紂囚之、翼侯炙、鬼侯腊、比干剖心、梅伯醢」とある。また、楚辞「天問」に

「何聖人之一德、卒其異方。梅伯受醢、箕子詳狂」とある。

**來革**：殷の紂王の臣、悪来のこと。『史記』秦本紀に「惡來革者、蜚廉子也」とある。また『漢書』東方朔伝の「非有先生論」に「是以輔弼之臣瓦解、而邪諂之人並進、遂及蜚廉・惡來革等二人、皆詐偽・巧言・利口、以進其身」とあり、蘇林注に「二人、皆紂時邪佞人也」とある。

**用國**：国を治めること。『荀子』富國篇に「仁人之用國、將脩志意、正身行」とあり、楊倞注は「用、爲也」とする。また『韓非子』亡徵篇に「女子用國、刑餘用事者、可亡也」とある。

59 悲仁人之盡節兮 仁人の節を盡くして

60 反爲小人之所賊 反かえって小人そこなの賊あやう所と爲るを悲しむ

仁徳のある人が忠節を尽くし、そのために却って小人に害されてしまうことが悲しい。

押韻：國、賊—職部

**王逸注** 言哀傷梅伯盡忠直之節、諫正於紂、反爲來革所譖、而被賊害也。

梅伯は忠直の心を尽くし、紂王を諫めたが、そのために悪来に譏られ、害を蒙った。そのことをかなしく思う、というのである。

**盡節**：心と力を尽くして自身の節操を守ること。『管子』形勢解に「入則務疾作、以實倉廩。出則盡節死敵、以安社稷」と、『塩鉄論』非鞅に「人臣盡節以徇名、遭世主之不用」とある。

61 比干忠諫而剖心兮 比干は忠諫して心を剖さかれ

62 箕子被髮而佯狂 箕子は被髮して佯狂す

比干は忠心から（紂王を）諫めたために胸を切り裂かれ、箕子は被髮して狂人のふりをした。

**王逸注** 已解於九章。

（比干のことは）すでに「九章」で説明した。

\*「九章」涉江の王逸注に「比干、紂之諸父也。紂惑妲己、作糟丘酒池、長夜之飲、斷斷朝涉、剝剔孕婦。比干正諫、紂怒曰、吾聞聖人心有七孔。於是殺比干、剖其心而觀之、故言菹醢也」とある。箕子については、「天問」の「梅伯受醢、箕子佯狂」の注に「梅伯、紂諸侯也。言梅伯忠直而數諫紂、紂怒乃殺之、菹醢其身。箕子見之、則被髮佯狂也」とある。

**比干**：殷の紂王の叔父で、しばしば紂王に諫言したため、殺された。『史記』殷本紀に「比干曰、爲人臣者、不得以死爭。迺強諫紂。紂怒曰、吾聞聖人心有七竅。剖比干、觀其心」とあ

る。

**剖心**：胸を切り裂かれること。『莊子』盜跖篇に「子胥沈江、比干剖心」と、『史記』魯仲連鄒陽列伝に「臣聞、比干剖心、子胥鴟夷」とある。

**箕子**：殷の紂王の叔父で、比干とともに何度も紂王を諫めるが、聞き入れられず、比干が殺されるのを見て、発狂したふりをして難を逃れようとした。『史記』殷本紀に「箕子懼乃詳狂、爲奴、紂又囚之」とある。

**被髮而佯狂**：髪を振り乱して発狂したふりをする事。『漢書』東方朔伝の「非有先生論」に「先生曰、接輿避世、箕子被髮陽狂。此二人者、皆避濁世以全其身者也」とある。

63 水背源而流竭兮 水は源に背かば流れ竭き

64 木去根而不長 木は根を去らば長ぜず

水は源に背けば流れが枯れてしまい、樹木は根を取り去れば生長できない。

**王逸注** 言水横流、背其源泉、則枯竭、木去其根株、則枝葉不長也。以言人背仁義、違忠信、亦將遇害也。

水はほしいままにあふれ流れて、源泉に背けば、枯渇してしまい、樹木はその根株を取り去れば、枝葉が生長しない、というのである。人も仁義に背き、忠信に違えば、害に遭うことをいうのである。

**水背源而流竭**：底本は「水背流而源竭」に作る。朱熹『楚辞集註』は、王逸注に「水背其原泉則枯竭」とあることを根拠として「背流而源竭」は「背源而流竭」の誤りであろうとする<sup>16</sup>。湯炳正等『楚辞今注』は「水背源」と下句の「木去根」が正対となることを指摘して朱説を補う<sup>17</sup>。今、それにしたがって改めた。なお『北堂書鈔』卷三十「政術部」弊政には「水背源而流竭、木無根而不長」とある<sup>18</sup>。

65 非重軀以慮難兮 軀を重んじて以て難を慮るに非ず

66 惜傷身之無功 身を傷るの功無きを惜しむ

自分の身を大事にして難を避けるわけではない、身を損なっても何の甲斐もないことを惜しんでそうするのだ。

<sup>16</sup> 端平本『楚辞集註』台北・華正書局、1974年、289頁。

<sup>17</sup> 上海古籍出版社、1996年、264頁。

<sup>18</sup> 『四庫全書』本に拠る。

押韻：狂、長、功—陽東合韻

**王逸注** 言己非重愛我身、以慮難而不竭忠、誠傷生於世間、無功德於民也。

自分は我が身を惜しみ、難に遭うのが嫌で忠を尽くさないのではない。この世に生まれて、民に何の功德も施すことができないのが誠に残念だ、というのである。

**傷身**：生命を損なうこと。『莊子』讓王篇に「能尊生者、雖貴富不以養傷身、雖貧賤不以累累形」とある。

**63～66**：63・64は、王逸注によれば「水背源」「木去根」が、人が仁義に背き忠信に違ふこと、「流竭」「不長」が、そのためにその人自身が害に遭ふことの比喩だということになる。しかしこの解釈では、前後の句と繋がりがなく、唐突な感じを否めない。

王夫之『楚辞通釈』は「水」と「源」、「木」と「根」の関係は、臣と君を表すと解し、「水背源」「木去根」は、君主の無道によって賢臣がその拠り所を失うこと、「流竭」「不長」は、賢臣が志を挫かれ行動を阻害されることの比喩だとして、61・62にある紂王と比干・箕子の故事を、水と木の比喩で説明したものと見る。しかしこの解釈でも、次の65・66との間には隔絶が生じる。そのため「故郷に恋々として身を遠ざけずにいるのは、逆流に引かれて枯れ枝にしがみつようなものである。どうして身を保全し命を守ろうとしないのか」という、原文には見えない説明を補うことで、65・66と関連づけようとしている<sup>19</sup>。

青木正兒『新訳楚辞』は61～66について「上の二句は前章の故事を承けて忠心の却つて害を被つたことを述べ、中の二句は人の生命の大切なことを比喩し、下の二句は作者自ら亂世に在つて梅伯や比干の如き犬死はしたくないとの意を明らかにしたので、寧ろ箕子の佯狂を慕ふもののやうである」と述べる<sup>20</sup>。

青木の解釈を参考にした上で、61・62の対句を正対ではなく、反対として読むとどうだろうか。比干が紂王を諫めた結果、殺されたことと、箕子が狂人のふりをした結果、殺されずに済んだことを対比させていると見るのである。65・66では「軀を重んじて」「難を慮る」のではなく、「身を傷」っても「功無き」ことを「惜しむ」のだと言っている。したがって、これらを繋ぐ63・64の「水背源」「木去根」は、人が「身を傷る」、つまり命を落とすことを喩え、「流竭」「不長」は「功無き」、つまりその人が残すべき功績が無になることを喩えているのではないか。肝心の命を落としてしまえば、なすべき事もできなくなるという意味で、青木の言うように「人の生命の大切なことを比喩」していると言えるだろう。明快な比喩とは言いが

<sup>19</sup> 蓋臣之有君，水木之本源也。君反道絶理，賢人無恃以滋長，則摧殘阻塞，勢所必然。若眷戀故郷而不遠引，是挽逆流而抱枯枝矣，何如全身隕命之得也（前掲注9、435頁）。

<sup>20</sup> 前掲注12、395頁。

たいが、比干のように命を落とすのではなく、箕子のように命を保つべきだということを言おうとしているのではないだろうか。

- 67 已矣哉 や 已んぬるかな  
獨不見夫鸞鳳之高翔兮 獨り見ずや夫の鸞鳳の高く翔りて
- 68 乃集大皇之壑 乃ち大皇の壑に集まり
- 69 循四極而回周兮 四極をあまね循くして回周し
- 70 見盛德而後下 盛德を見て後に下るを

もうおしまいだ。見たことがないか、あの鸞鳥や鳳凰が高く飛んで、やがて天の野に集まり、四極をあまねくめぐって旋回し、盛徳の人を見つけてそこにおりていくのを。

押韻：壑、下一魚部上声

**王逸注** 大皇之壑、大荒之藪。言鸞鳥・鳳皇乃高飛於大荒之野、循於四極、回旋而戲、見仁聖之王、乃下來集歸於有德也。以言賢者亦宜處山澤之中、周流觀望、見高明之君、乃當仕也。

「大皇の壑」とは、大荒の藪のことである。鸞鳥や鳳凰は高く大荒の野に飛び、四極をあまねくめぐり、回旋しながら遊び戯れるが、仁義を備えた聖王を見つけると、おりてきて集まり、その有徳の人のもとに身を寄せる、というのである。賢者もまた山沢の中に身を置いて、広く世の中を見渡し、高明な君主を見つけたら、その人に仕えるのがよいというのである。

**鸞鳳**：瑞鳥の鸞鳥と鳳凰。楚辞「九章」涉江に「鸞鳥鳳皇、日以遠兮。燕雀烏鵲、巢堂壇兮」とあり、王逸注は「鸞・鳳、俊鳥也。有聖君則來、無德則去。以興賢臣難進易退也」とする。また楚辞「哀時命」に「鸞鳳翔於蒼雲兮、故增繳而不能加」と、「九歎」遠游に「駕鸞鳳呂上遊兮、從玄鶴與鷓明」とある。

**大皇**：天のこと。『莊子』秋水篇に「且彼方趾黃泉而登大皇」とあり、陸德明『經典積文』卷二七「莊子音義中」に「大皇、音泰」とある。そして成玄英の疏に「大皇、天也」とある<sup>21</sup>。また『淮南子』精神篇には「登太皇、馮太一、玩天地於掌握之中」とあり、高誘注は「太皇、天也」とする。

**回周**：旋回すること。『淮南子』原道篇に「恬然無慮、動不失時、與萬物回周旋轉、不爲先唱、感而應之」とある。

- 71 彼聖人之神德兮 彼の聖人の神徳なる

<sup>21</sup> 郭象注、成玄英疏『南華真經注疏』、無求備齋莊子集成初編、第4冊、725頁。

72 遠濁世而自藏                      濁世を遠ざかりて自ら<sup>かく</sup>藏る

純粹な徳を持つ聖人は、濁世から遠ざかり自ら身を隠す。

**王逸注** 言彼神智之鳥、乃與聖人合徳。見非其峩、則遠藏匿迹。言己亦宜効之也。

あの神聖な智を持つ鳥は、聖人と同じ徳を有している。その時ではないと見て取れば、遠く身を隠して跡をも隠してしまう、というのである。自分もまたそれを見習うべきだ、と言っているのである。

**神徳**：純粹な徳。『淮南子』原道篇に「機械之心藏於胷中、則純白不粹、神徳不全」とあり、高誘註には「精神專一之徳、不全也」とある。また泰族篇に「巧詐藏於胸中、則純白不備、而神徳不全矣」とある。なお『史記』屈原賈生列伝の賈誼「弔屈原賦」に「所貴聖人之神徳兮、遠濁世而自藏」という類似句がある。

73 使麒麟可得羈而係兮              麒麟をして<sup>おもが</sup>い<sup>つな</sup>がして係ぐを得べからしむれば

74 又何以異<sup>犬</sup>羊                      又た何を以てか<sup>犬</sup>羊に異ならんや

麒麟もおもがいを付けて繋ぐことができてしまえば、犬や羊と何の違いがあろうか。

押韻：藏、羊一陽部平声

**王逸注** 言麒麟仁智之獸、遠見避害、常藏隱不見、有聖徳之君乃肯來出。如使可得羈係而畜之、則與犬羊無異、不足貴也。言賢者亦以不可枉屈爲高、如可趨走、亦不足稱也。

麒麟は仁と智を備えた獣であり、遠くから察知して害を避け、常に身を隠して現さないが、聖徳の君主が現れば自分から出てくる。もしおもがいを付けてつなぎ止めて飼うことができるならば、犬や羊と変わらず、大切にするには及ばない、というのである。賢者もまたねじ曲げることができない点はその崇高さであるのに、もし使い走りをさせることができるならば、賞賛するに及ばなくなってしまう、と言っているのである。

**麒麟**：伝説上の瑞獣。『孟子』公孫丑上に「麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥」と、『礼記』礼運に「鳳皇・麒麟皆在郊楛、龜龍在宮沼」とある。

**異<sup>犬</sup>羊**：犬や羊のような平凡な獣とは異なる。『史記』屈原賈生列伝の賈誼「弔屈原賦」に「使騏驎可得係羈兮、豈云異夫犬羊」とある。